

第9分科会①

協議 題 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

研究テーマ 自立と共生の実現に向けた教育活動の推進

～特別支援教育の協働体制強化と特色ある教育活動の展開を通して～

提案者 長崎県南島原市立大野木場小学校 校長 山外 誉

1 はじめに

本校のある南島原市は、長崎県の南部、島原半島の南東部に位置し、北部は島原市、西部は雲仙市と接しており、有明海をはさんで熊本県天草地域に面している。市内には日本におけるキリスト教の光と影を示す歴史遺産が数多く存在し、その中でも「島原・天草一揆」の終焉の地として有名な「原城跡」は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録された。その他にも、南島原市を含めた島原半島地域は、世界ジオパークに日本第1号で認定された地域でもある。

本校は、その島原半島南西の山麓に所在する通常学級6、特別支援学級2、児童数80名（令和5年度）の小規模校で、平成3年の普賢岳噴火により旧校舎焼失後、校区全域が警戒区域に設定



され、仮設校舎での教育活動を経て、平成12年から現校舎で学んでいる。

平成16年には、学校敷地に隣接して「かどわき歴史災害記念館」が開館

し、大野木場小学校区の雲仙普賢岳噴火災害の歴史資料を展示する施設として、子どもたちの日常の学習にも活用している。



被災後は、「災害教育を基盤とするふるさと学習」に継続して取り組んできたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、日常の教育活動や地域社会・関係機関との連携が制限され、現在に至っている。

また、小規模校ではあるが、特別支援学級在籍児童が令和3年度は9名、令和4年度は5名、令和5年度は6名、各学級に配慮を要する児童が複数名在籍するなど、特別支援教育の推進体制の整備が急がれる。

2 主題設定の理由

急速な情報化や技術革新による Society5.0 時

代を生きる子どもたちは、予測困難で変化の激しい社会の中で、自立し社会参加するための資質と能力を身に付けるとともに、SDGsの理念を踏まえた共生社会の形成者として活躍することが期待されている。

また、現行の学習指導要領等では、自立と社会参加を見据えて、個別の支援・指導や、配慮を要する児童の障害や特性の状態等を考慮して指導の充実を図るとともに、全教職員が連携・協働して特別支援教育に取り組む体制づくりが求められている。

そこで、他者と関わり合う中で、「自立」を自ら考え行動すること、「共生」をお互い認め合い、ともに助け合っていこうとすることと捉え、特別支援教育の協働体制強化を推進することと、特色ある教育活動を展開することで、「自立と共生の実現に向けた教育活動の推進」につながると考え、本主題を設定した。

3 研究の視点

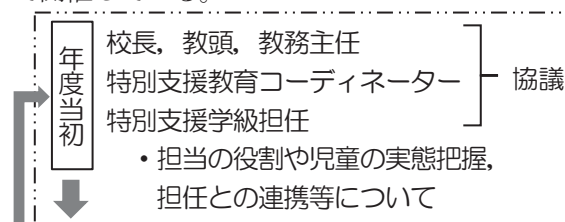
- (1) 特別支援教育の協働体制を強化し、個別の支援・指導や配慮を要する児童の自立を促すことを通じて、他者と共生する力の基盤を養う。
- (2) 特色ある教育活動である「災害教育を基盤とするふるさと学習」を実践することを通して、すべての子どもが自立し、主体的に社会参加するための資質と能力を育む。

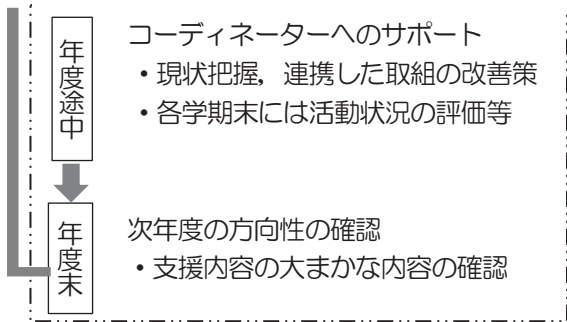
4 研究の実際

(1) 特別支援教育の協働体制強化

① 校長としての関わり（リーダーシップ）

特別支援教育コーディネーターと特別支援学級担任を交えて、方向性を決定する。これを受け、校内支援委員会を開催し、共通理解・実践後、次年度への支援体制の確認を行う。校内支援委員会は定例会と臨時会があり、機動性をもたせるために、令和5年度はメンバーを精選して開催している。





② 教職員や保護者、関係機関との関わり

ア 教職員間の連携

配慮を要する児童に対して、どのような支援をしていくかをコーディネーターと教務主任、各担任で、時間割を基に話し合い、支援員の配置方法について検討し、決定する。

学年	月					水					金				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1年	国	算	体	生	国	国	算	国	生	算	国	算	国	体	学
2年	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体
3年	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体
4年	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体
5年	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体
6年	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体	国	算	理	社	体

【時間割一覧表】

イ 保護者との連携
担任やコーディネーターが面談を実施したり、特別支援教育に対する理解を求めるとの話をしたりして連携を深める。

また、通級指導教室開設へ向けて

のアンケート調査を実施したり、特別支援教育に関する懇談会を開催したりした。

通級指導教室開設についてアンケート調査結果についてお知らせ

保護者の皆様、保護者の皆様には、まずまず御協力のことで感謝申し上げます。結果より、本校の特別支援教育の現状と課題を伺いました。ありがとうございます。

さて、本年度アンケートでは、保護者から保護者への通級指導教室の開設の要望がありました。そこで、今年、通級指導教室の開設に向けてアンケート調査を行いました。

結果として、保護者の皆様からは、通級指導教室の開設を希望する方が多く見られました。また、通級指導教室の開設に賛同する方が多く見られました。また、通級指導教室の開設に賛同する方が多く見られました。

なお、アンケートの結果は、保護者の皆様へお知らせいたします。

調査日：7月15日(金)

本校へ通級指導教室の開設を希望される方（どちらかを○で囲んでください）

学年	児童名

【実際のアンケート用紙】

ウ 幼稚園や保育園との連携

夏季休業中に校長・コーディネーター・1年担任で訪問し、年長園児の実態把握を行う。

エ 特別支援学校や医療機関、南島原市との連携

特別支援学校とは、年2回居住地交流を行っている。医療機関とは、担任が、児童が通院している医療機関を訪ねて指導法を学ん



だり、情報交換をしたりしている。南島原市子ども支援部会による保護者への啓発活動も行っている。

(2) 特色ある教育活動の展開

① 校長としての関わり（リーダーシップ）

噴火災害を経験した学校として、長年、特色ある教育活動として、災害教育を基盤とするふるさと学習に力を入れ、取り組んでいる。

まず、年度当初、プロジェクトチーム（メモリアルデー実行委員会）を立ち上げ、方向性を決定する。



「メモリアルデー」とは、旧大野木場小学校の校舎・体育館等が火砕流により焼失した9月15日をメモリアルデーとし、これまでの学習の成果の発表の場とする

とともに、噴火災害の記憶を伝えたり、砂防事業の重要性や砂防に対する意識を高めたりしている一大イベントである。

次に、方向性を基に、教育課程の追加修正を指示し、年間を通して、各学年が災害教育を基盤とするふるさと学習に取り組む。

3年：避難区災害について知ろう(30)					
かどわきに行ってみよう	ろうそくを作ろう	防災からいじめの発見に行こう	メモリアルデーについて	身近にいる人に取材しよう	かかったことをまとめよう
					学んだことを発表しよう
4年：避難区災害について知ろう(22)					
かどわきに行ってみよう	ろうそくを作ろう	災害緊急時や石を投げる災害発見	メモリアルデーについて	調べたことをまとめよう	学んだことを発表しよう
5年：避難区災害について復興の努力を知ろう(35)					
調べた計画を立てよう	かどわきに行ってみよう	フィールドワークに出かけよう	発表の計画を立てよう	学習したことを発表しよう	発表の準備をして、発表しよう
					これまでの活動を振り返ろう
6年：発信しよう！避難区災害からの復興と未来への提案(20)					
出張学習を振り返ろう	パンフレットにまとめよう	たくさんの人に発信しよう	メモリアルデーについて		これまでの活動を振り返ろう

【総合的な学習の時間のカリキュラム】

② 教職員と子ども、子ども同士の関わり

校長の方針を受け、地域の遺産や施設、関係機関と連携しながら、復興の様子に触れる災害教育を基盤とするふるさと学習を実践していく。年度末には、実践を通して各学年の目標を達成できたかを評価し、次年度へつなげる。

ア 2年生「まちたんけん」（生活科）

2年生は、生活科の学習に取り組む過程で、災害教育を基盤とするふるさと学習につながる新たな地域教材の発見があり、交渉を進めた結果、無人化施工の管制室や大型重機の操作体験等、貴重な体験をすることができた。



【無人化施工の管制室】

イ 3・4年生「普賢岳災害について知ろう」

3年生は、かどわき歴史災害記念館や砂防みらい館の見学、4年生は雲仙岳災害記念館や土石流被災家屋保存公園を見学し、普賢岳災害に対する【かどわき歴史災害記念館】理解とふるさと大野木場について学習を進める。



【土石流被災家屋保存公園】

また、雲仙岳災害記念館が毎年開催している「いのりの灯」にもキャンドル作りを通して参加している。

ウ 5年生「普賢岳災害について復興の努力を知ろう」

5年生は、雲仙岳災害記念館の方の協力で、フィールドワークを行い、普賢岳災害について理解を深め、後世に伝えていこうとする意欲を育てている。

そして、9月15日のメモリアルデーで、これまで学習したことを地域や保護者の方に発表する。



【フィールドワーク】

エ 6年生「発信しよう！普賢岳災害からの復興と未来への提言」

6年生は、この学習のまとめとして、これまで学習したことを発信する。発信方法については、校長の指導の下、教頭が連絡・調整し、担任と検討しながら進めていく。

これまでに他県の学校とのリモートによる交流を行ってきたが、令和4年度はVファーレン長崎が行っている雲仙普賢岳噴火災害を通じた防災啓発活動の一環として、協力依頼があった。検討の結果、ホームゲームにおいて、試合の前にファンやサポーターのみなさんに発信するいい機会だと捉え、実施した。



【発表の様子】



【トランスコスモスタジアム長崎】

(3) 学校経営及び教職員育成

① 年度当初

学校経営方針で、本年度の重点指導における具体的方策に、「特別支援教育の充実」と「災害教育の充実」の項目を掲げる。

教職員は、その方針と自分の取組がリンクするように、「人事評価票（業績評価）」で明確にし、学級経営を行っていく。

めざす学校像 ～安心・信頼・笑顔あふれる学校～ ○来校・・・楽しさを創り出す学校 ○学校・・・安心して学べる学校 ○他校・・・心と力を合わせる学校	～子どもを愛し、育む～ ○目標・・・書 ○共感・・・共 ○強弱・・・心
本年度の児童への重点事項 (德育)「やさしさ」のアップ・・・①挨拶 ②返事 (知能)「かしこさ」のアップ・・・③読書力 (体育)「たくましさ」のアップ・・・④心の大切さ ⑤何でも良べ	
本年度の重点指導における具体的方策	
(1) 学校の実態に即した教育の充実 学校教育の管理－	(2) 学校・家庭・地域が共に高め合う教育の充実 学校経営－
①校内研修の推進（算数科） ・学習タイムの活用 ・学習指導案の積極的な活用 ・定数を重視した授業 ②特別支援教育の充実 ・校内委員会の活性化 ・特色に応じた支援の充実 ・児童理解の充実 ③災害教育の充実 ・災害教育を推進とするふるさと学習の充実 ・総合的な学習の時間の充実 ・30周年メモリアルデー	①PTAとの連携強化 ・ゆあての実践 ・家庭学習の活性化 ・早寝・早起き・朝ご飯 ②地域との連携強化 ・ゆあての実践 ・地域人材の活用 ・生活や総合的な学習の時間 ③教育方針の積極的な継承 ・学校により ・学校により ・保護により

【学校経営方針の一部】

② 学期末

校長の学校経営方針を基にした学校評価を行う。到達度を把握し、次学期へ向けての目標や課題を具体的に示し、教職員に対して意欲付けを行う。

特別な支援を要する児童に対して、児童の特性に応じた手立てを講じている。	4	6	0	0	3.4	85.0	
保護者と連携を図りながら、児童理解に努めている。 ○支持的風土づくりや温かく礼儀正しい言葉遣いを指導している。 ○交流でAさんと毎日一緒に過ごす中で、子どもたちの優しさが育まれていると感じる。みんなでAさんを大事にしようという気持ちが育っていると思う。 ○保護者と実際に会って話をし、コミュニケーションをとり、実態や把握に努めた。今後も継続して行っていく。	5	2	1	2	3.0	75.0	
発達段階に応じた災害教育を基礎とするふるさと学習に取り組んでいる。	6	2	0	0	3.8	93.8	
メモリアルデーに向けて主体的に関わろうとしている。	7	4	5	1	0	3.3	82.5

【学校経営方針と学校評価の一部】

5 成果と課題

(1) 成果

① 特別支援教育の協働体制強化

ア 様々な活動への意欲（自立）の高まりとお互いを認め合い、ともに助け合っているとする姿（共生）が高まりが見えた。

特別支援教育の充実	4	4	6	0	0	3.4	85.0
特別な支援を要する児童に対して、児童の特性に応じた手立てを講じている。	4	6	0	0	3.4	85.0	
保護者と連携を図りながら、児童理解に努めている。 ○支持的風土づくりや温かく礼儀正しい言葉遣いを指導している。 ○交流でAさんと毎日一緒に過ごす中で、子どもたちの優しさが育まれていると感じる。みんなでAさんを大事にしようという気持ちが育っていると思う。 ○保護者と実際に会って話をし、コミュニケーションをとり、実態や把握に努めた。今後も継続して行っていく。	5	2	1	2	3.0	75.0	

【教職員学校評価の一部】

イ 児童のアンケートでは、「学校が楽しい」の回答で、9割の児童が肯定的な回答をし、楽しく登校できている様子が分かる。

か し く た ま ま く ま	4	先生や友達の話最後まで聞いている。	44	37	8	1	3.4	84.4
	5	授業中、自分の考えや思いを発表したり、伝えた りしている。	28	27	32	3	2.9	72.2
	6	進んで読書をしている。	29	25	28	8	2.8	70.8
	7	生き物の命を大切にしている。	58	28	4	0	3.6	90.0
	8	好き嫌いなく何でも食べている。	49	26	14	1	3.4	84.2
	9	外で元気に遊んでいる。	59	23	5	3	3.5	88.3
		大野木場小学校は楽しい。	59	26	4	1	3.6	89.7

【児童アンケートの一部】

② 特色ある教育活動の展開

ア 他者と関わり合う中で、自ら考え、行動しようとする力（自立）と仲間や郷土を大切に思う心（共生）が育まれている。

災害教育の充実	6	発達段階に応じた災害教育を基礎とするふるさと学習に取り組んでいる。	6	2	0	0	3.8	93.8
	7	メモリアルデーに向けて主体的に関わろうとしている。	4	5	1	0	3.3	82.5
		○新たな教材を発見でき、実施することができた。 ○メモリアルデーでは見学したり聞いたりしたことをもとに、災害について調べたりまとめたりできた。本番ではたくさんの方の前で発表することができ、自信となった。 ○交流を通して有意義な学習活動ができた。地域の強みを発信する機会を得られたことは大きい。今後も、ぜひ、続けてほしい。 ○カリキュラム編成を行ったことで、系統立てた学習活動ができた。子どもたちの感想からも大野木場地区を大切に思う気持ちが育っていると感じる。						

【教職員学校評価の一部】

(2) 課題

① 特別支援教育の協働体制強化

ア 客観的に児童の実態が把握できるような体制をつくり、継続的な特別支援教育の推進を図る必要がある。

イ 複数の教職員が関わる体制において、打合せや振り返り等、共通理解・共通実践のための時間の確保が必要である。

② 特色ある教育活動の展開


ア これまでの取組内容を吟味し、教職員の育成や地域社会の要望等を考慮した上で、より関わり合える新たな教材の開発が必要である。

イ ウィズコロナの中、これまでの取組内容を検討し、より関わり合うための効果的な指導方法の開発を図る必要がある。

6 おわりに

子どもや教職員、保護者、地域の願いをどのように学校教育活動に反映させていくか、校長の学校経営に委ねられている。特別支援教育の協働体制の強化に加え、被災校としての災害教育を継続すること、児童や保護者のニーズを見極めて学校経営をしていくことが、自立と共生の心を育むことにつながっていくと考える。そのために、今後も明確なビジョンに基づく創意ある学校経営に取り組んでいきたい。

生きていたんだね
～校庭のいちょうの木に寄せて～



詞・曲 寺井一通

一 校庭のすみの
いちょうの木が
ながい冬を しっかりたえて
春の 日ざしあびて
あたらしい芽をつけた
生きていたんだね
おまえのように
ぼくたちも わたしたちも
前を むいて
歩いてゆきたい

二 あの日 うもれた
みどりの山に
すがた けた 小鳥のこえが
春の 風によって
このまちにも 聞こえてきた
生きていたんだね
おまえのように
ぼくたちも わたしたちも
前を むいて
歩いてゆきたい